THE LADIES' JOURNAL OF EDUCATION.

驛遞局認可

明治十九年十一月十五日

定價金四錢

女學叢誌

第四十二號

每月三回發行

績文舍

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

目録

●〔女學叢誌〕前號の續●〔中外新報〕十數件●〔學藝一斑〕幼兒敎育學○理學一斑●〔對譯〕西洋の俚諺○西洋禮法對譯●〔列女傳〕水沼はな女の傳●〔雜記〕芳野拾遺名歌の擧筋書○學校家庭子女輕忽微傷手當法○賢女金言集●〔新作物語〕巣守の妻第十回〔春のや主人稿〕●〔家政要報〕蝙蝠傘手當の心得其他數件●〔御伽草〕女の學問と芝翫の三弦○猿と狐○數學問題考物等●〔寄書〕女紅の問及答

◎女學叢誌

○如何なるを女らしきといふ乎（前號の續き）

世の人の子女を敎育するを見るに男らしきとか女らしきとか兎角に男女の區別を立つることとなれども余輩が前々號の紙上に於て論じたるがごとく女子たればとて男子と同一の食物を食して生活するからには これを得るの方法もまた同一ならざるを得ずされば男子が學者となりて生活を立つれば女子もまた學者となるを得べく技藝家ともなり職人ともなるべく男子が馬に乘れば女子もまたこれに乘るべく男子が走らば女子もまた駈るべく躍ぶべく踊るべし男子が大聲に論ずれば女子もまたハッキリと辨ずべし凡そ世の中のことは何事たりとも男子の爲すべきことにして女子の爲し得られざることやあるべきこれを是れ男女同權とはいふなり最早今の世の中となりては眞逆に男女同權なるは惡しゝ男は尊くして女は卑しきものなり女子は男子の奴隷なり翫具なりといふものは無るべし然るに兎もすれば手紙の書ぶり道の歩行き振り笑ひやうから物の言ひ振りに至るまで斯くては女らしからず左ては男らしゝなど婦人の一擧一動何ごとに就ても男女の差別を立んとするは誠に以て不思議千萬なりといはざるを得ざるなり余輩が嘗て論じたるごとく人の世にある目的は成るべく多くの人と成るべく大なる幸福を得んとするに外ならずしてこれを一家族に就ていふ時は親兄弟も妻も子も召使ひの下女下男に至るまで皆うち寄りて互ひに中よく睦まじく世の中を面白く笑ふて暮さんと願ふことにて斯るをこそ happy home 即ち幸ひなる暮し向きとはいふなれ我々が毎日稼ぐところの目的は乃ちこの幸福なる暮しをなさんが爲めの外ならずして能く稼ぎよく働らくものは多くの仕事をなし隨つて得るところの幸福もまた多く且つ大なるべしされば眠れる狐は鳥を得ること能はざるの道理にて能く働きよく稼ぐにあらざれば決してこの幸福を得ると叶はずとは今更らいふに及ばさる事にて一人して働くと二人して働くとは孰れか多くの仕事をなし得べきやと問はんに俚諺にもいふ仕事は多人數と答ふる外はなかるべし然

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

るに世の中の有さまを見るに一家族中稼ぎ人働き手といふハたゞその家の主人たる男子一人にして親兄弟も妻も子供も手飼ひの犬猫にいたるまで皆この主人の腕よのミ依頼し主人一人の脛を嚙りてのミ生活するものなれば主人たるもの〻骨折もまた非常なりといふべく芝居も換り目毎に觀せしめ衣服も時々の流行ものを供へ頭のものより足に穿く下駄にいたるまで一として仕送りを怠るときハ意氣地なしとの働らきなき男なりとか世に嘲ふるべけれども如何なる前世の惡業よてか男と生れ一家の長子相續人とは生れいでたるならん寧ろ次三男と生れ(譬ひ兵役に服する年限の聊か永かるとも)部屋住たり懸り人となり婦女子と生れて良人の厄介ものたるの身樂なるよハ如かざるなり斯る家族の組たちにて幸はひなる暮しをなさんことを思ひもよらざるところにして譬へば五人暮しの家族ならんにハろの中四人ハ喰ひ潰したり乃ち全國三千七百万人の中稼人たるものハ僅かに七百四十萬人にして殘る二千九百六十萬人ハこれが脛嚙りたりといふべしかくてハいかでか一國の富强を望むべきされバ如何に親なればとて腕腰達者にしていまだ行暮れたりといふ齡ならざるに强て隱居をなし可愛き伜の脛を嚙るまも及ばざるべく況して主人の妻たるものが良人の稼ぎに出でたる留守番をさへよくなさバこと足り顔なるハ沙汰のかぎりとこそいふべけれ既に仕事ハ多人數と心附きたらんにハ日々の仕事を良人一人の手に任せおかずともことならん一人の稼ぎ人を增すときハ乃はち一倍の幸福を增すの道理にて到底貴きも卑しきも綛きがけとなりて夫婦共稼ぎの心懸なくてハ幸ひなる暮しをなし親にも孝を盡し同胞にも厚く善良なる子供を敎育すること難かるべしされば女子たりとて男子と〻もに世に立ちて生活の道を得んとそるにハ何ごとも男子と異なるところあるべからず良人が官員たらばろの家の細君ハ學校の敎員たるべく兄が商人たらば妹ハ職人となり弟が學者ならんにハ姉ハ美術家たるべく男子が十里の道を行かば女子もまた十里の道を步行べく男子が千斤の荷物を持たバ女子もまた千斤の重荷を負ふべきなり然るに前號に述べたるがごとき世にいふ女らしき女たらんにハいかでか男子と〻もに世の中に立ちて活潑なる働らきのなし得らるべきこれ余輩のいふ女らしきと世にいふ女らしきとハ大いに異なる所以にして余輩のいふ女らしきとハ乃はち世にいふ男らしき女とこそいふなれ否ャ男勝さりの女丈夫たらんことをこそ望ましけれ(完)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎中外新報

◎女官の禮式　女官がたの禮式は是までの女禮式に從はれたりしを增々交際の道開け行き外國の婦人に接することも繁かるべき時勢となりては從來の女禮式によるべきにあらざれば今度その筋にては歐米の禮法にならひ新禮法を設くべしとて目下取調べ中なりと聞えぬ

◎月次舞踏會　貴婦人のかた〴〵には去る八日鹿鳴館に於て月次舞踏會を催ほされたり

◎高知縣婦人交際會　丸岡掌典夫人その他の方々の發起にて今度高知縣婦人交際會といふを設けられしところ谷子爵婦人を始めその他本月九日までに入會ありしもの百五十餘名に及びたりと聞ぬまた毎月一回づゝ適當の場所に於て集會せらるゝことに定まりしよし

◎井上伯爵の夜會　去る三日の天長節に鹿鳴館に於て外務大臣が催ほさせたる夜會に來會ありし貴顯紳士の數はその多かりしこと六七百名といふなるに今年は何ゆゑにや婦人がたの數のいと少なくぞ見受られぬこれ洋服の持合せなきと舞踏に熟せぬ方々はそれを耻かしく思さるなどにてのくは尻込したる方も多かりしならんといへど如何にやさることもありてか白襟紋附の和服つけたる方は兩三名にて多くは舞踏會員たる貴婦人のみと見受けられしこれに反して西洋の婦人は例年よりも多かりしは日増しに交際の開け行く故とぞ思はる兎も角も同夜は館内に於ては舞踏あり音樂の催ほしなどあり館外にては數百本の烟火を打上くるなど中々の盛會なりき

◎貴顯の說諭　この頃のことなりとか或る貴顯より貴婦人たるものは以來成るべく公會へ出でゝ内外の人々と交際を廣むべく公會に出づるには必ず洋服を着くることゝいたし度しさらば自づと舞踏も見習ひまたは外國語學の上に於ても益あるべしなど細かに最寄の貴婦人がたに說諭ありしと聞きたるが前項に記るせし夜會の有樣より思ひ起されしといふにもあらざるべし

◎婦人交際會　伊藤伯爵夫人その他のかた〴〵の計畫になりたる同會は追々會員も增加せしに付會場を新築あるべしとて目下その場所を選定中なりといふ

◎婦人洋服裁縫の講習所　洋服の裁縫を敎へて婦人に生計の道を得せしめ且つは婦人服制の改良を計るが爲とて今度有志者が發起して芝愛宕下町へ洋服裁縫婦人講習所といふを設

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

立せり

○和算を廢せんとそ　府下各小學校にては來る一月より珠算を廢して筆算のみを以て教授することになるべしといふ今俄かに實際に實用せるものを廢せんとそるは記者甚だ不同意なれども小學校の兒童として珠算によらず筆算のみに慣れしむるは良きことならんと思はる

○白木屋の奮發　日本橋通一丁目の白木屋にては今度女服の裁縫に名譽ある洋人ヴォンカッテス孃を雇ひ入れ禮服舞踏服のごときは勿論婦人一切の服飾を新調するには差支へなしといふ婦人方に取りて近頃便利なりといふべし元來我が邦にては農家が先祖傳來の水田を改めて畑となし商家が仕にせの暖簾を改むるなどの事は嘗てなき風習あるを今度白木屋の洋服裁縫店と開きたるが如きは能く奮發して舊習を破りたりといふべし序に云べきは府下の諸商店に横文字を以て軒に掲ぐる看板のとなり一として語格に叶ひ滿足なるはあらぬが中にも洋服店が最も多ければ洋服店に就ていはんにTailor Merchantとの甚だしきに至りてはTailor Dealer など〻ありて裁縫師を賣買する店といふ類が多し外國人の目には嘸かし可笑きことゝなふんこれらは瑣細の事なれども看板とさへいひて表面に飾るものなれば心得ある洋學者に頼みてあろと思はる白木屋の看板もまたこの部類中に入るべきもの歟と見たり

○新形源氏髷　鍋町髷といへば誰でも知りて居る髷入の本店神田鍋町十八番地の太田龜次郎は今度彼の田舍源氏の立女形藤の方の丸髷を擬しこれまで鍋町形と人のいふた髷手のものより餘ほど品好く源氏形と號けて賣出したので大層風流るといふは是も一つの改良なるべしとやまと新聞に出たるが如何のものにや餘り野蠻髷は流行さしたくないものなり

○音樂會　一昨十三日は豫て記せし訓育啞院の慈善音樂會の當日ありしが前日の風雨にも似ず快晴となりたれば眞の慈善者と音樂の好奇者と御義理の固まりとで狹からぬ奏樂堂も寸地を餘す所なく後れて見えられし貴婦人は芝居でいさば蟲棧舖に居らざるを得ざれば掛り員は後ろの椅子を取り除け婦人は前に出られよ男子は後ろへ往き給へと男子追放令を發し少し寛きと覺えられたり扨て山勢松韻の巣籠り、晒は大氣込なりしゆゑか手琴は殊に面白く次は明樂なりしが或る人は凡耳には何となく渺眠く寧ろ眠樂とせば如何と傍らの人に咄せしにその人曰く併し折々太皷の響で目の覺る氣味あり後ろで音のみを聞けば華族の葬式に折々飴屋がパン屋が來た樣だと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

答へたり是らハ事と解せぬ謬見にて取るに足らず次ハ清樂の雷神洞なりしが是ハ大に面白く明樂より清樂に移りし所ハ殆ど本調子から二上りよ轉せし如く花やかの中に品格を備へ月琴よりも別嬪揃ひだと怪しかる譽め樣をなしたる人もあり次の松竹梅ハ名に古董先生といふ腕前なれば勿論面白く次の唱歌、ピアノは御器用に能く覺えられ教師も無滿足と申すに外ならざるべしと日々新聞の評とろの儘拜借

◎桑港通信雜誌　ハ今度大に改良せしとて第十號を送られたり中々よき雜誌となれり

◎學藝一斑

○幼兒教育學

[學校に於て交際を結ばしむるの法]庭家に於て交際の勢力あるよと既に前節に述べたるがごとし況して學校に於ては猶更らに善良なる交際の關係と養成そべきなり抑も家庭の交際ハ甚だ狹隘きが故にその中に成長する小兒に對してハ仲間の感情甚はゞ厚く各々同一の心を以てその子と大切に取り扱ひその子の心よ逆ふこと更らになけれどもこの狹隘き家庭の仲間と去りて學校に入り一層大なる仲間に交るときハろの仲間ハ皆他人にして各々家庭にある時ハまさ均しく大切に取扱かとれたるものなればろの心も樣々にして同一ならず時としてハ相反對することもあるべきなりされば家にある時とハ異なりてろの仲間と共に平等なる群の一人たるに過ぎざるなりこゝに於てその仲間相互ひの間に生ずるところの權利義務の支配を受けざるを得ず故よ家庭よあるときとハ大に異なりて何事も新たなるを覺え相互ひに感情を交換し相互ひの平等を保つべき考へもあく俄かに異ると不信用とと以て疑も生じ恐怖の心も生ずべしこの心を除くこと肝要にして斯くのごとく一身に収縮り己れの胸中のみに感情を閉込むることを除かざる間ハ決して教育するを得ざるなりこれを除くの法ハたゞ愛情を以て導くの外ハあらざるべし愛の心を生ずるときハ恐怖の心なく恐怖の心を去らしむるものハたゞなる完全なる愛情の外ハなく愛ハ信と含み信ハ小兒の交はる社會に於て經驗と智識とを含有せり(以下次號)

○理學一斑(第四十號の續き)

(第十六節)水ハ壓附くるべきものに非る事　既に前にも述べたるごとく水ハ他のものと均しく外のものをろの中に突込むときハ必ずこれよ抵抗するの力あり然るよ他の諸物ハ抵抗

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

する力あるにも拘わらずこれを搾め附け或ハ壓附タてその容積を小さくなすことを得べしといへども水ハ總て他の諸液體と同じく殆んど壓附るべからざるものなり水のごとく軟かなるものにしてこれと押し附くることの鐵よりも難しとハ不思議のことなれども水ハその形を變ずることと甚だ易くこれを搾め附ることハ最も難き性質のものなり狹きものゝ入れたる一インチ(凡そ曲尺八分)四方の水を壓そゝ十五斤(凡そ一貫八百目)の重さと以てすれば僅かに二万分の一の容積を減ずるといへり水ハ水銃の下端を水中に入れその活塞子を上方へ引き上ぐる時ハ水ハ水銃の筒の中に上るべしこれを逆さまになし活塞子を少し押して聊かの水を出し筒の中ハ水のミとなりたるときその端に指を當て活塞子を以て押す時ハ指頭に非常の力と入るゝも尙ほ迸し出る水と止むること能わざるべし若しこれを止め得たる時ハ活塞子ハ動かざるべき筈なるに少し動きたることあらバそハ活塞子の上に水の漏れ出たるが故なりされバ一インチ四方の活塞子を以てその筒の中に一インチの高さに水を入れこの活塞子を一インチの一割押し下げんとするにハ三万斤即ち凡そ十三噸(凡そ三千六百貫目)の重さにて押ざるを得ず

(未完)

◎對譯

○泰西箴諺の直譯

(甲)㈠盲㈡人(ハ)㈢夫れ(と)㈣見る㈤べく㈥喜ぶ(で)㈦ある㈧べし

(乙)㈠朝(に)㈡於て㈢一片(ハ)㈣終日(二語にて)㈤何もなき㈥より㈦より善く㈧ある

MAXIMS & PROVERBS.

泰西の箴諺

(甲) A blind man would be glad to see it.

(意譯) 盲人ハ見たがるべし

(乙) A bit in the morning is better than nothing all day.

朝の間ハ一片でも終日何もなきよりハ善し

DON'T (SUBEKARAZU).

DON'T, as an invited guest, be late to dinner. This is a wrong to your host, to other guests, and to the dinner.

DON'T be late at the domestic table, as this is a wrong to your family, and is not calculated to promote harmony and good feeling.

Enkwai ni manekare-taru toki wa, osoku yuku BEKARAZU. Kore shuzin nimo, ai-kyaku nimo, sono enkwai nimo yoki koto niwa arazu.

Kanai no shokuzi nimo osokaru BEKARAZU. Kore kazoku ni taisi yokarazu site, katu kokoromoti yoku masumasu wagō sen to suru mono to nasazareba nari.

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎列女傳

〇水沼はな女の傳

湯桁は幾個と古くより算へし伊豫の國喜多の郡大洲の仲町よ年久しく住める水沼喜三右衛門といふ人ありけり長男伊藏長女何某次女はなと三人の子をもてり喜三右衛門は明治三年の比身まかり長女何某もまた世を早うしたるが伊藏は富む家に生れて華奢に耽り商業にも疎かりければさても愛たき舊家ともて崇められしも忽地に衰へはてゝ所有地住宅も明日香川のせゞ變りゆきて雨露を凌くばかりのわびしき矮屋に移り住むことゝぞなりぬる昨日までは深き窓のうちに養はれて荒き風にもあてじともてかしづかれしとなも出ては井のもとに解き衣と洗ひ入りては崩れたる土竈のもとに飯炊きなどなれぬ手わざにやつれ果て夏は汗あえながら乱れたる髪もかき揚るいとまなく冬は長き夜を縫針のひざにわかして手足のひえ冰ると厭はず心の限りいそしみ努むれど猶もの足らず旦暮にたつる烟のたゞはそりのみ行けば或人はなど斯くちをしき年月は送り賜ふらむ此比さるべき人の嬖妾一人ほしと云はるゝが其が好みは身もと賤しからぬが今は思ふさまならず世を味氣なく暮らすなどぞよき心ばえ優れて萬にたのもしくは月々の化粧の料も多く取らせむもし父母などの年老て世にふるたづき無くは夫とも引取りて養はむといふは又有るまじきよき口に侍らずやなど勸むれど耳にも留めず固くいなめば又ある人は斯云はゞ差すぐいて無禮とも思さむが母君の肌薄う寒げに在するに美服着せ參らせ兄君の垢づき汚れて籠りのみ在するに折ふしの心遣ぐさせさせ參らせむの願ひならば頓にとゝのふべき事ありそは縣の廳に仕へらるゝ人のいつの程にのゝいまゝて深く思ひ懸て通ひすまばやと云はるゝを許し賜ふひとつにこそあれ零落れたる人の親のため同胞の爲には身をうき河竹の流れに沈むる類さへ多くわるに是はさる辛う悲しき事にはあらず母君兄君に仕へ賜ふも只心の儘にこそ物せらるべけれなど切に勸むるは難波江のあしかれとにはあらざるべしとなは斯ると云はるゝ度に最聞ぐるしう耳おほふばかりに思へどしかそかに腹立ちて謝絶るべくもあらねば其折々ごとに口惜し涙ながら母兄にもとひてかりて賴み參らそることも侍るべしなど答ふめり斯樣の事たび重なりて堪へ難きと貧しさも日にけに添りて今はすべき樣もなくなれる時などにや有けむさも思ひきりたる体にて兄伊藏の前にゐざり出つゝいふやう

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

凡人の子たるものハ世々承傳へたる家のなりはひを守りて聊かにても押廣めて末めでたからむ樣に心碎くぞ常なるさハあれど人にハ好める筋と厭ふことゝあれば小田のから鋤のすきたる道によりて五百代の田面を千代にと願ふもあるべくまた其田面をすて營業とかへてうるまの市の市街に住かへ賣買のくぼさによりて數あまたの土藏建つらねて親々の名まで愛たき例に引出ゞるべく勵ミつとむるも有るべし我父君の代迄ハ此二つながらいと富裕に在して市街に住ひて賣買の道にも其名高くまた田畑の方もいと多くて其方にも土地の長とさへ稱へられ賜ひきされバ何方よまれ好むかたに力入れて物し賜はば斯はかなくハ零落れざらましと

七百十五

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

何事もたゞ懶き心癖のふしのまゝに放棄はて賜ひしかバ斯淺ましき体にハありにたり人と生れてハひとつ思ひ得たる筋に就きて身をも立て家をも興し夫より進みてハ君の爲國の爲に盡すことも心のまゝなるべし只なす事もなく世に經る甲斐もなくてわらむハ耻かしとハ思さずや斯ても猶とごゝろを奮ひ起し賜ハずとならば終にハ餓死の外あらじかし妾ハさるはのなき終りを見むより深き淵にも沈み高き木にも溢れて果なむこそ心やすけれ母君のためにハ先立て御歎きを見せ參らせむことハと心苦しけれど今となりてハ一人の口をだに減さむがこよなき幸と思しとらるゝならむかしとてさめ〴〵と打泣きつゝいふに伊藏も夢の覺たるごとくに我身の甲斐なきとゝ悔歎きつゝ今まで萬に懶く怠りてのみありしハ取かへすべくもあらねどひと度ハ此耻すゝかずてハ有るべからず此比教導團の生徒と募集せらるれバ如何思立ずやなどいふ人ありしが若志願とげて入るとのあらば必ず人に優る程の勉強もしてむといふに花の欣びいかばかりならむ夫より種々に辛苦して旅費整へつゝ出立せしが誠にはなの諫の身にしみてにやおみ〴〵ならず勉め勵みしかバ十四年の比よハ軍曹といふに昇進しといへば今ハ然るべき處に居るなるべし斯て後はなハ人の髪結ふとを營業として朝夕に怠らず遠近とかけめぐれハ其心バえを愛て多く物取らする人などもありて日よ月に活計を得たれば此うちより僅つゝの餘金を積立て終にもとの家を買ひ戻しまた其土地をも償ひ出したりとぞ世に貧しき家の娘ハ身を賣て其活計を立るをバこよなき事のやうにいひ思へどさる賤しきわざをせず兄を諫め家を興したるハまた類ひなく愛たき少女とこそいふべけれ

前號上條きむ女の傳下段十三行帶なりとの●ハとの○十九行物の數のば●ハか○ハの誤植なり

◎雜記

○芳野拾遺名歌の譽筋書（前號の續き）

〔二幕目〕（楠正行假陣營の場）この場ハ楠の假陣營に郎等和田新發智源秀、和田新兵衛正朝および前段の南宮八郎等列座せるまへよ前段内侍に無禮せる時景の郎等伴吾はじめ六人繩附にて引出され居り源秀ハ繩附に向ひ罪状と申開けることなどありし末わが君正行朝臣こたびの功よのへて汝等一同の命は申し受たり左るにより只今繩目を釋し追放なす旨を申し渡す六人ハ其恩義に感じ楠 の先手につき今の罪を贖はんと

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

懇請して已まず源秀はいよいよその赤心と見定め左らバ昨夜御所に忍び入りし曲もの伊賀の局の勇力にてその場よ落命なじ詮議の手蔓を失ふたり左れどもこのほどより擧動怪しき多田院法橋汝等彼が方に至り篤と實否を探り來らばそを一つの功となし御大將に推擧し遣さんとの旨を述べ正朝は六人を連れて這入る」こゝに前段梅ヶ枝の父藤六梅ヶ枝を縛りて引立來りその賊徒の手先を働きしを怒責て散々折檻のことあり所に正行舍弟正時出てこれを止めろの縛を解のしめ藤六は奥へ這入る跡よ梅ヶ枝ろの罪を詫る言譯のセリフ色々ありトヾ追放の命を承たまむり軍兵に引立られて出て行く」折柄軍兵一人走り出で四條中納言隆資卿何か御内勅を蒙らせられ辨の内侍諸共に俄かに御入來なりし趣きを取次く正時は兄上よ申し上げんと奥へ這入る「知らせによりて、楠家の棟梁 楠 左金吾正行は烏帽直垂嚴かに威儀を正して出迎ふ」の床にて正行奥より出來る下手より隆資内侍を伴ひ除々と出來り座定りて隆資は今般御上正行の功を賞し給ひまたその定まれる妻なき由と聞食され更めて辨の内侍を下し賜むる旨御内勅を奉し來りしよしを述ぶ正行は有難き御上の寵命光榮身よあまれども婚姻の義は御免を蒙り度と荅ふこの處にて色々往復セリフありとゞ(隆資)君の叡慮も承じながら特よ婚姻を拒まるゝは定めし深き仔細ぞあらん委細具さに申し聞されよ隆資これにて承まはらん(正行)ハ、君の叡慮は幾重にも有がたく承まはるまた辨の内侍が身に於ても聊か障りは候はずト申せども婚姻の儀に至りては勅免願ふ正行が心中の程ハテ何をがな床「何か思案の胸の中獨りうなづき正行が」源秀文臺を是へ(源秀)ハ、アと文臺料紙を持來る正行は一首の和歌を書て「これ正行が勅荅の心をこめし一首の和歌御内見下されよ」とさし出す、隆資手に取上る内侍もともにこれを見る(隆)とても世にながらふべくもあらぬ身の假の契りをいかで結ばん(内)とても世にながらふべくもあらぬ身の(隆)假の契りをいかで結ばんト両人互ひに顔を見合せ暫しは詞なし正行は内侍に向ひ御身を厭ふにあらざれば必ずあしう思されなトあるに内侍は「何とて悪しく思ひませうや斯く申さば淺き女子の鳴呼なることと笑はせ給はんか知らねども昔し下野の形名の妻は蝦夷を征伐にいたりしとき夫を助けて敵勢をかけ敗りまた左馬頭義仲朝臣の令寵巴御前は君の馬前に先駈して平家の軍をうちしときく妾も同じ女子なり甲斐なき身といいはるゝともヤハかこの人々に劣るべきイカでよき大將と因ミを結び夫は外に敵

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

をなびけ妻は內に士卒と勵まし夫婦こゝろを一つにして君の御爲め國の爲め命を棄てんと思ひしに 楠殿には斯るお覺悟今さら何と申しやうもござりませぬ」と明すに正行感心なし縱ひ婚姻は結ばずとも今よりこゝろを一つにして忠臣烈婦の名を殘さん必ず心おかるゝなト慰むれば內侍も事をわけたる正行朝臣の御詞これに過ぎたる喜びなしこれにつきて妾一つの願ひありとて伊賀の局に對面を許されよと乞ふこれにて對面のことありトヾ正行屹と心附き節を守りて折角に叡慮に戻るは本意にあらず幸ひなるかな舍弟正儀いまだ年若には候へども義心兄にも優れるもの伊賀の局と婚姻を取結び夫婦諸共君を輔け奉つらば聊か叡慮を慰むる端ともならんとあるに皆々これに同じ前段の正儀もまた一間より出て承諾の旨を述ぶ源秀は盃の用意に奧へ這入る」下手より前節の和田正朝甲冑にて出來り時景の郎等を使ふて法橋をおびき出し途中にて搦め取り拷問の上遂一白狀致させし旨を注進して引込む」跡に正行の尋ねに應じ正儀伊賀の局両人ノリよなり賊徒を防ぎ君を守護し參らせんとチヨボを合手に面白きセリフありこの中に追々銚子土器を運び出し皆々盃事あり(正行)これにて互ひの固めも濟み(內)さゝる事なき三々九度(隆資)君にも嘸かし御滿足(伊賀の局)これでこの身の願も叶ひ(正儀)互に盡す忠義の操(源秀)松の常磐の末長く(正)祈るは君の御齡(內侍)內と外とは隔つとも(局)心は常に相生の(正儀)頓て凱歌の時至らば(正行)兄弟夫婦打集ひ今この如く悅び歌はん 床「口にはいへど正行が覺悟はそれと正儀もこれがこの世の訣れかと一滴こぼす勇士の涙」(隆資)目出度婚姻整ふうへは我はまれより參內なしこの由奏聞申すべし(正)某しも諸共にこれより直ちに參內なし多田院が罪狀奏聞致さん(隆)斯る目出度折なればーさし祝して御立あれ(正)然らば御免と立ち上り「普天の下卒土の中いづく王地にあらざるや」と下座の柏子よなり「頓て名にしおふ關の戶」云々と田村と舞ふこの中隆資前節の和歌の懷紙を開きつくづく見ることありて正行と顏を見合せ一寸氣をかへるも木の頭にて「石山寺とふし拜みこれも淸水の一佛と賴まれはひに近江路や勢田の長橋ふみならし駒も足なミや勇むらん」と正行舞ふ隆資懷紙を卷きながら愁ひの思ひ入れ皆々正行の舞を見込むにて段落となる　（未完）

○學校家庭子女輕患微傷手當法(第四十號の續き)

小兒の煩らふべき病氣は人のよく知るところなれば一々こゝよ詳說するに及ばざれども馬脾風、哽咽、麻疹、猩紅熱、天然痘

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

眼の炎症、皮膚の風疹などは皆小兒の患ひ易き病症なり
右の諸病は多く傳染症にして一人の病者より他の健康なるものにうつりて追々蔓延するものなりされば清潔になし空氣の流通をよくし病者の排泄物（記者曰く呼吸よりも排泄し皮膚よりも排泄して空氣を汚すものなるがゆゑに排泄物とはたゞ大小便或は吐物などのみと思ふべからず）を滋滞せしめざること第一にしてまた食物に氣を附け躰温を適度に保ち自躰の疲勞を來すがごとき事をなさゞるなどは皆豫防法の著明きものなり眼病、皮膚病などには病者の用ふる手拭と他のものゝ用ふる手拭とを混用すべからず殊に傳染症の病氣にありては他の小兒をして患者に接近せしむべからず小兒は別して感染し易きものなればなり疥癬または瘰癧類のごとき皮膚病或ひは頭皮の諸病などは傳染し易きものなればその病者をば他の健康なる小兒に接近せしめざること肝要なり小兒のよく患ふる發疹熱即ち天然痘、痲疹、猩紅熱などにありては快復の後といへども皮膚の有樣元のごとくなり皮のとれるべきものは皆取れ瘡痂、膿などの全く取れたる後にあらざれば決して學校または家にありて他の小兒と交はらしむべからず尤も痘痕など赤くなりて殘りたるは敢て避るに及ばず

常に變りたる病候あるときは速かに醫者を迎へて治療を乞ひ決して猶豫すべからず假令ひ瑣細のことなりとも終には大病となることあれば一寸したる病氣にても素人の考へを以て醫者に依頼することを怠るべからず

然れども右に述べたる諸病の外に腸胃胸部の調子聊か違ひたるかまたは通例の風邪のごとき一寸したる輕き病患は小兒のよく患ふるところなるがこれらは素人たりともよく氣を附けて手當をなすときはその功なしとすべからずされば左に輕き病ひ微しの負傷などにて素人たりとも取り扱ひ得らるゝ簡易なる手當法を述ふべし（未完）

○賢女金言集（大阪花のや菟道君の報）

宣秋門院丹後曰　皆人の生れはすなをなる物なれども其習ひによりて善人惡人とはなれり、然ば父は子に教へ子は又善になれて假そめにも惡人に交るべからずさるものゝ歌に

植て見よはなのそだゝぬ里もなし心からこそ身は賤しけれ

よき人にむつひて惡きとあらしあさの中なる艾き見るにも

兵衛の佐曰　おごれる人を見て己れがいましめとし物につゝしみふかき人を見て己れが師となさば身終るまで心よかるべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎新作物語

○巣守の妻　第十回　　春のや主人稿

瀧口の夫といへるはその名を弓弦となん呼び做しける元來昔し風のありふれたる性質世才こそ人並より優りにたれ別にこれぞといふ長處もなしされどエレキ力の名殘しるけく今尚は若干の俸給を繼ぎて鬚さへ八の字に引渡したりされば邸裏の長屋連中さてハ新開の巷路者ハまことに結構なり羨ましとぞいふめる此等ハその外面の安げなるを見て内輪ハ知らぬ火の心盡し無量の心配が春毎に來りて地震のたび毎にビクリ〳〵眉根に八の字の痕絶えぬを曾て思はざるに因る事ぞかし瀧口ハ平生より内々心配して思ひけるやう斯くてハこの行末覺束なし遠き慮なき時にハ近き憂ありと誡めたまひし聖人の確言ハまことに尊し今にして良家へ女を縁附ておかざる時にハ俄かに狼狽して悔ゆとも詮なし殊に倅事ハ幼少なるゆゑ斷然免官となりたらん後にハ外より金錢の入るべき道なし然あれば萬一の柱となるべき良家を親族となし置くこと目下の急務なりと言はざるべからず女もモウ既に十七歳教育ハある標緻は佳し欲目かハ知らねど頗る美し漢學も出來る洋學も出來るドウシテ女學校の生徒の中でも女程出來るのハ少い位ましてや琴だけハ憚りながらへ、ン鹿鳴館おいでなさい芝の紅葉館に參りませうフ、ン我が子ながら感心なもんだ所でさて無れのハ佳い婿だテ當今ハ洋學の世の中學者が用ひらるゝ世の中ゆゑ是非とも洋學者で無うてハ叶はぬ洋學で無うてハ月給ハ取れぬハテ誰にしたものでがなト時にハその妻とも寐物語地震の方針やら女の行末やら色々樣々に苦勞すれば中々この夫婦の胸の中ハ外目と大違ひ忙しい事なり

或日瀧口ハ官より退りて急ぎ細君をかたへに呼び「何や、エライもんだエライもんだ實に感心にエライもんだ」あまりに唐突に賞賛かけられ流石の細君も氣を呑まれて「チヤマア何ですエト怪訝な貌附弓弦ハポッケットと搔さぐりて急ぎ新聞紙を取出して「お前ハ尚知らねハ不審ハ道理おれも今日はじめて知ッたことじやが何と羨ましいことでハないか實よエライまことに感心な實にエライ小杜の新坊が亞米利加で彼國の學校で賞典を貰ッてその事譯ハかやう〳〵その次第ハ云々でト無暗滅法よ賞たつれバ元來我夫を神のやうに思ひて（家内の政略ハしばらく置き）何にも理窟めきし判斷につきてハ悉皆その夫の判斷を奉じて金科玉條とも尊重せる忠實貞良なる御

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

臺所はたちまちフラ〳〵と煙に巻かれて雷同賛成の薄い唇「直正にマア」と「感心な事」と「エライ」と「實にマア」をチャンポンにして暫しは諸共にほめたゝへてありしが「小杜は元來財産家であるのに子息が斯のごとき學者にてあれば思ふに行末は福々なるべし子息新作は新聞紙に因れば遲くも明春には歸國するとのことなり定めしたちまちに官吏に擧られ必ずエライものになることとなるべし思ふに月給も莫大なるべし聞けば倘だ嫁女は無いとの事なりまんざら因縁のない中でもなし女を遣ッては「といひかけられ細君覺えずも肩ぐるみにうなづき満面やぶれさうに笑を含みて「テモマア宜い所へ宜うマア郎君、ほんとに宜いところ

七百二十一

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

へお氣がついた昨年尋ねたまゝ小杜の宅へは薩張かは出去をいたしませねど大方元の儘で移住もすまい早速明日にも、何の善は急げです、お長(女めの名)を挈ッてまゐりましてハア内々に見合の積りでイ、エサ當人が居ませんとても姑の氣に入れば出來たも同然なんの郎君、そんなで心配は餘計なことイ、エその邊に如才はないキッと說得して來ますほどに」ト例の獨り臺辞大呑を込み翌日大急ぎで外出の支度さりとはまだ忙がしいおとなり

女のお長といふ才發けたる少女は年來英學に肩を凝らしてthatのitなどはいふが更なり原語で談話さへも出來るといふ甚だ恐れ入ッた學者なるゆゑ宅に來客などある折には故意〳〵次の間まで出張して成るべく細やかなる小さな聲にて微かに客の耳へはいる程に洋書をペラ〳〵と誦讀して成るべく聞えぬやう氣を配るとは扨も年若には感心なものなり博學に誇らず温良恭謙これらが當世の淑女であらうと近所合壁はイザ知らねど瀧口一家内の輿論はほめけり

件のお長孃は高尙なる性質平生その友との談話の序に屢々情交の重んずべきを說けども苟にも肉交に類したることはいはず「妾は願はくは有爲の士に嫁して國家の一部分と見做されんと思ひますッ舊幕時代の婦人のやうに空しく良人の奴隷となッて卑屈に一生を終るとは妾の甘んじないところでありますこれを要するに女子の權利を擴張することが第一であるから妾は飽くまでも勉强して脩學しやうといふ精神です」トをり〳〵この娘めが口にする說とのやさても男優り感心なものなり權利擴張と脩學とは果して如何やうなる關係ありやと内々つぶやくもあるよしなれどこれらは近邊の放蕩書生出來ない相談の八ッあたりなるべし

さるにこの孃はおさなきころ筒井筒の幼稚き昔し小杜の新作とは知人なりし「君ならずして誰れかは」など口ようち誦すべき年齡にもあらねど流石に利發なる性質だちとて已にそのころより新作を知りてこの人憎からずと鑑定したりき現にや栴檀は嫩葉の喩へ感心にも恐れ入ッたものなりそのゝち相わかれて生長りしゆゑに最はや新作のことなんどは全く忘れ果てゝありけるところに昨日圖らずして、隣越しに小杜の噂さばなし漏れ聞きつゝ「扨ては新さんがアの新さんが今ではそのやうな學者になッて……チヤ嬉しいこと新さんのところへ妾しを……

(今日の繒解はまたこのつぎ)

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎家政要報

○蝙蝠傘　の保續のよからんことを思はゞ常に手置をよくそべしスチユーデント新聞を見るに雨天に用ひて濡れたる時は尚にも石突の方を下になして立ておくべからず手柄の方を下になし立おく時はよく水氣を去り速に乾きて絹の質永く保積りとあり心得おくべき事なり

○二子編　は近年非常に下落せしが今年の夏初より稍上進し中直は一反五十八九錢より六十二三錢となり目下は別て冬物需用の時節なれば益々上進すべき筈なるに却て一反に付十七八錢も下落せしといふ

○編物の糸　近來編物の流行により毛糸の相場を引上々目下一ポンドに付二圓二三十錢なりといふまた子供の手遊に毛糸を用ふるは不經濟なりとて毛糸に擬したる木綿の編糸を製造そるものありて至極便利なりと聞く

○紀州蜜柑　は不作にて例年より凡そ三分を減じたれば直段も凡二割方高價に至るべしと同地よりの報に見ゆ

○白米　は一圓に付二等米一斗三升二等米一斗三升九合三等米一斗四升四合四等米一斗五升五合五等米一斗六升九合

◎御伽草

○女の學問と芝翫の三絃

女の子に學問は入らぬものなり第一に裁縫第二に物讀むと手習ひとなれど之も深い事は無用なり學問といふ程の奥深いとを知れば高慢になりて愛嬌を失ひ何となく憎さげなる者なりとは中等以下の事理の分らぬ母親達が普通の口實なり或人が之を諭すとて妙な話をそるを聞くに愛嬌を失ひ憎さげになるといふは學問の罪ではなく夫はする人の罪なり芝翫は遊藝の中では何が一番功者で有まそと問へば三絃とは誰も先答へるに違ひなし扨阿古屋の三曲を勤た時後生大事に拙劣な琴を彈く間はどことなく憶した樣の体が見えて如何も遊君が思懸ず白洲で彈せらるゝ樣で在たが三絃になると最よいといふ体で音調もよく撥音爽かに彈ところは得意らしけれど阿古屋が責られるといふ狂言の筋は失て只芝翫が功者に三絃を彈とし か見えなむだとは某見功者の評判なり然らば阿古屋を勤むる俳優は三曲の拙劣なのが宜かといふに左樣ではなく三絃許より琴も胡弓も功者の人の勤るがよし之と同く女の子も學問はすべき者でよい敎育を受て學問をしよく學問の道を會得すれ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ハ是が爲に愛嬌も増し可愛さも添ふ筈なり今母親達の學問を嫌ふハ恰ど阿古屋の役ハ三曲の拙劣がよしと云に同じからむ

○狼と狐　　　散遊亭　園蝶　述

エー代り合まして代りばへも致しません私ハまだ皆様に名廣めハ致しませんが是のらハ折々此席イヤ紙上に出まして何のお子供衆のお慰みにもなり亦お爲にもなる事を申上てご機嫌を伺ひたいと種々心配いたして居りますが何分口否筆不調法なる私ゆゑ足はぬ所ハ何卒お目こぼしを願ひ上ます其御禮やら名廣めを兼まして此頃に皆様を何處へお招き申す積りでございますから何卒當にせずとお待を願ひます扨欲に耽ると終にハ身を失ふといふお咄を一席申上てお暇を頂戴致しまする、頃ハ寶暦八年だかどうだか判りませんが或る狼が狐を捕へました、見れば小才覺もある狐らしい今嚙殺して仕舞も惜いものだそれよりハ手馴して召使ふが宜いと考へまして狼ハ或る日狐を召連れブラ〳〵と出掛けました狐も亦殺さずと召使ふとハ有難い一生懸命に忠義を盡したいといふので供をして參りますと狼が「狐ヤ何ぞ私れの喰る物を見附て來い」ト申ますから狐ハ「ハイ向ふの野原に子羊が澤山遊んで居りますからアレを一疋獲て參りませう」ト子羊を獲ッて參りますと狼ハ一疋を不殘喰ッて仕舞「中々美ひ今度ハそれが行く〳〵」ト自分でノソ〳〵と出懸ましたスルと親羊が見附て聲を立てましたから羊飼が何事ならんと棒を以て出て見ますと狼が居るので己れといひさま狼を毆ちました毆れて此方ハ這々の躰で迯て歸りましたから狐ハ心の中にア、先のでおけば宜いのに餘り貪るから斯ういふ事が出來たと突ッた顔を顰めて居りましたが翌日も亦連立て出懸ますと例の通り狼が何ぞ喰たいと申すので狐が或る農家へ這入り臺所の方を見ますと皿に菓子が盛てございますから竊と六片許り持て來て狼に喰させましたスルと狼ハ喜んで喰て仕舞ましたがまだ足りないといふので狐の止るとも聞かずまた自分で出掛て見ますと皿に菓子が殘ッて有ので欲張て皿ともに持て出やうとしてツヒ取落しましたから此音を聞き附け人々が寄て狼を散々に毆ちました狼ハ跛足を引ながら歸ッて參りましたから狐は見兼て「餘り貪食てハ主公の御爲にならぬと」忠告を致しましたがその翌日も同じく出掛まして何か欲いと申しますから狐が「向ふの家に豚を殺してありますからアレを」と申しますと今度ハ狼も同伴に往うといふので連立て往て狐と供に喰ひ初めましたが狼ハ「狐汝ハなんでそんな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にキョロ〳〵する」トいひながら無宙になッて喰て居りまそ狐ハまた誰か來ハせぬかと見廻しながら用心して喰て居りましたが餘り貪ッてハいかんと考へて「モウ宜い加減にして參りませう」と勸ても「序でに皆喰ッて往う」とナしまして動きませんスルと人聲が致ますそから狐ハ心の中にこれハウカ〳〵出來ぬ斯なに身を忘れるほど貪欲なものとハ一所に居られぬ後にハ己れも喰うだらうと斷念て迯て仕舞ました狼ハ頻りに喰て居る所を見附て終に殺されましたこれが貪欲なものハ終にろの身を失ふといふお咄でございますまた此次に何かご機嫌を伺ひませう 男「お靜かに入ッしやい—

○數學問題

(甲)或る人金二千三百圓をろの二子に配分せしに長子ハその金を以て三町五反の地面を購へりまた弟ハ四町二反の地面を買はんとするよその金の不足する事僅かに拾圓なりといふ然る時ハ各々得たる金ハ幾何なりしや

(乙)間口奥行とも平等なる地面あり而してその坪數ハ二千三百〇四坪なりといふ然るときハその一方面の長サは何間となるや

○考へもの〻題

男にも女よも附く字あり如何なる字あるや

〔右の答ハいづれも本月三十日までに本舍へ達するやう御投寄あらんことを乞ふその後に屆きたるものハ本誌に記載せず〕

○第四十號數學問題の答式

(1) $18:12::1:x$ $x=\frac{12}{18}=\frac{2}{3}$ 答三分二

(2) $1\frac{3}{8}\times10\frac{8}{11}=\frac{59}{4}$ 答十四ト四分三

(答者)(1)東京麻生次郎、同菊地健次郎、岡山齋藤いち、遠州安川伊太郎、同松川ひで(2)伊勢窪田二郎、尾張伊東花、神戸多田義行、横濱黒川さと、東京中村かね、同宮川次郎、同齊藤貫京都村山太郎、長野糸川竹次郎、同安藤幾太郎、越後荒川よし

◎寄書

○女紅とハ如何　[illegible]　みさを

女紅場といふハ如何なる譯にて紅の字と用ふるや識者の教示と乞ふ

〔記者曰す、漢書ニ錦繡纂組害女紅者也とありて古ハ工字通て紅に作れり故に女紅ハ女工にして鍾嶸詩品に晉樂之有琴笙女工之有黼黻とあり拾遺記に獻女工一人善織以五色絲内于口中手引而出之則成文錦とあるも皆同じ事ならんと思ハる尚ほ明解あらば讀者の投寄を乞ふ〕

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

はしかき

人毎に一つの癖はあるものを吾にはゆるせ敷嶋の道」と古人のすさみしもむべなる哉人一度風雅の道に入ては又之を捨べきやうやある身の貧富貴賤を問はす倶に樂しみ倶に喜ぶは此道を棄て又他に求むべからざるありされば飛驒の匠が「樂みは貧にあり梅の花」と詠せしは實に甘味ある名吟と云ふも不可なかるべし然るに拙鄙も聊か此流の水溜に少許の水垢を嘗め初めしより愈々其味と覺え今は其身のつたなきをも顧みずそが上流を汲み玉ふ風流士等と交際を結ばんものと思ふにつけては亦古語に己の好む所ハ人亦之を好むとの金言もあれば定めて世には同じ感覺を懷ゐるゝ雅君も多からんとの己が充て推量より思ひつき爰に一つの愚案を起し日本雅人懇信會てふ名義を設けて普く全國雅人の玉詠を集め月毎に一回宛風雅に關する雅友叢誌てふ雜誌を發兌して之を會員に頒ち又ハ世に公に賣弘て益々雅道を盛ならしめ讀者をして恰も一机上に全國の雅人と一大懇信會と開くの思想を爲さしめ爾後雅人をして風流上の交際を親密ならしめんとはかりす世の風流士等何卒本會規約上御一覽の上續々御入會あらん事と祈る

明治十九年秋九月　花の屋のあろし菟道春千代のふる

●日本雅人懇信會規約

●本會ノ目的タルヤ廣ク全國ノ雅人ト懇信ヲ結ヒ以テ雅學ヲ盛ナラシメントスルニアリ●本會ヨリ毎月一回雅學ニ關スル雜誌ヲ發兌シ之ヲ雅友叢誌ト名ク●雅友叢誌ハ之ヲ上下ノ二卷ニ別チ上卷ニハ○和歌○狂歌○詩○狂詩ノ四種下卷ニハ○俳句○狂句○情歌○冠吟ノ四種ヲ登錄ス●本會々員タラント欲スル者ハ雅名及ヒ住所姓名ヲ詳記シ之ニ加盟金ヲ相添ヘ本會事務所ヘ送致アルヘシ但シ加盟金ハ初度一度限リノ事●本會々員タラント欲スル者ハ加盟金トシテ金拾錢ヲ差出ス事但特別會員ハ加盟金ヲ要セス●本會ノ會員タル者ハ左記ノ中孰レカ一雅ヲ所得スルニ限ル可シ○和歌○狂歌○詩○狂詩○俳句○情歌○冠吟●會員ハ本書ヨリノ出題ニ依リ續々出詠アルヘシ但出詠ハ一人各種五章ヲ限トシ撰定ノ上拔章ノ分ヲ本會雅友叢誌ニ登錄ス尤モ一人ニテ數種ヲ合セ出サル・モ妨ケナシ●詠草ハ各種類ヲ別チ別紙ニ記載之事但出詠ノ郵税ハ自辨タル可シ●撰者ハ特別會員ヲ以テ之レニ充テ有名ナル諸大家ニ乞ヒテ之ヲ委任ス●本會發兌ノ雅友叢誌末欄ニハ雅事ニ關スル質議答辨之項ヲ設ケ各自研究ノ一助ニ供ス●雅友叢誌ハ假令會員タリトモ都テ前金之事但會員ニハ定價ノ二割引ヲ以テ之ヲ頒ツ

日本雅人懇信會事務所　大阪東區北新町二丁目三十一番地（骨屋町角）　雅友叢誌社

發起者　大阪　花の家さくら　城東　龍水漁夫

教育時論第五十六號　明治十九年十一月五日發兌

○社說各府縣の私立教育會○論說現今教育上ノ一疑問（能勢榮）○學術婆氏教員養成論（松嶋剛譯）マツナブ氏植物學（佐藤龜世譯）○雜記英文三節、家庭教育（一題）○傳記彌爾學術傳（町田則文）田中登作合譯）○論題高等小學ニ於テ實業教育ニ充ツベキ時間及學科程度（一題）○女子ノ教育ヲ普及セシムル方案（三題）○內外雜纂三十件○官報抄錄○廣告數件

發兌所　東京下谷區練塀町十四番地　開發社

社告

地方看客に對し前金相切れ候節ハ本誌發送見合候に付引續き御購讀相成候方ハ前金相切れざる內御送金可被下候

續文舍會計掛敬白

本誌代價表

壹冊	正價金四錢	此郵税壹錢
拾冊	同金三拾八錢	同拾錢
二拾冊	同金七拾五錢	同二拾錢
三拾冊	同金壹圓拾錢	同三拾錢
四拾冊	同金壹圓四拾錢	同四拾錢

但シ東京十五區內郵税不申請

本舍は御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ雜誌配達不仕事に相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵税共郵便爲替又ハ通運便にて御送附あらんことを希ふ●郵券代用ハ壹錢切手ニて一割増し●郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込み其爲替券ト本舍へ御送附可被下候　但し東京十五區內ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

發行所　東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　續文舍

持主兼印刷人　松本義弘

編輯人　初鹿野錦五郎

大賣捌　東京芝區愛宕町一丁目三番地　修正堂

同　神田區淡路町　巖々堂

同　神田區佐柄木町一番地　東海堂

同　大坂備後町四丁目　岡嶋文店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY